

チャールズ・ウェスレー  
——福音と出遭った詩人

馬淵 彰

序

チャールズ・ウェスレー (1707–1788: 以下、チャールズと略す) は、1729年にオックスフォード大学で設立された「ホーリー・クラブ」でも、また、1738年の信仰体験においても、兄ジョン・ウェスレー (1703–1791: 以下、ジョンと略す) よりも先んじており、それゆえ、チャールズを「最初のメソジスト」と呼ぶことも可能である。しかし、日本のメソジスト研究においては、ジョンとメソジスト運動の陰の立役者としてしかチャールズは扱われてこなかった。チャールズについての詳細な研究は、日本では見当たらない。讃美歌作者としてのチャールズはこれまで、『礼拝と音楽』で何度か紹介されてきた。園部治夫「チャールズ・ウェスレーの讃美歌」と原恵「ウェスレー兄弟とその讃美歌」がその代表である<sup>1</sup>。しかし、その両論文が参照した二次資料には日本の研究論文がほとんど何も含まれておらず、このことから、チャールズ研究が日本において立ち遅れていることが分かる。

欧米諸国においても、チャールズはジョン研究の付随的なものとして扱われてきた歴史が長く、ジョンに比べればチャールズの歴史像は不明瞭な

ままといった印象を拭えないが、しかし、これまで、主にイギリスとアメリカにおいてチャールズと彼の讃美歌についての分析や評価が繰り返され、そして、チャールズの讃美歌や日記、手紙などの収集や刊行といった作業が積み重ねられてきた。欧米諸国の主要先行研究については、1960年代初頭にフランク・ベーカーが紹介している<sup>2</sup>。また、近年では Teresa Berger がより詳しくまとめている<sup>3</sup>。それらによると、最近の研究では、従来のように、チャールズを「讃美歌作者」と定義することや、また、チャールズの讃美歌をメソジスト派の神学の代表と解することに対して再検討がなされている。

そこで、本稿では、まず、メソジスト派讃美歌におけるチャールズの讃美歌の重要性を確認し、その後で、二つの論点——(1)「讃美歌作者」としてのチャールズの定義と(2)メソジスト派「神学」への彼の讃美歌の貢献に関する解釈——に焦点をあてて、主にベーカーとそれ以降の欧米研究者の成果によって得られた諸々の事実や視点を整理し、そして、それらがもたらした研究上の意義と今後の課題を明らかにする。

I. チャールズとメソジスト派讃美歌集

ウェスレー兄弟は生涯を通じて讃美歌集を編纂し出版しつづけた。ジョンとチャールズによる讃美歌の編纂・出版は多種にわたっており、また、いくつかの讃美歌集は何度も再版されている<sup>4</sup>。

ジョンは、英国のアメリカ植民地ジョージアのチャールズタウンで最初の讃美歌集を出版した。このチャールズタウン讃美歌集は、既存の讃美歌をジ

<sup>2</sup> Frank Baker, *Representative Verse of Charles Wesley* (London: Epworth Press, 1962), pp. ix–x.

<sup>3</sup> Teresa Berger, 'Charles Wesley: Literary Overview' in S.T. Kimbrough, Jr. ed., *Charles Wesley: Poet and Theologian* (Nashville: Kingswood Books, 1992), pp. 21–29.

<sup>4</sup> John Wesley, *The Works of John Wesley* (以下 *Works* と略す), 14 vols., (Michigan: Baker Book House, 1986) Rep. from the 1872 edition issued by Wesleyan Methodist Book Room, London, Vol. XIV, 'List of Poetical Works' pp. 318–345. Baker,

<sup>1</sup> 園部治夫「チャールズ・ウェスレーの讃美歌」『礼拝と音楽』9号(日本基督教団出版局、1976年)14–21、47頁。原恵「ウェスレー兄弟とその讃美歌」『礼拝と音楽』52号(日本基督教団出版局、1987年)28–33頁。

ジョンが編纂したものにすぎず、チャールズが作った讃美歌は一つも含まれていない<sup>5</sup>。しかし、1738年の*Collection of Psalms and Hymns*にはチャールズのものと考えられる讃美歌が二つ見られる。翌年1739年に出版された*Hymns and Sacred Poems*でも数は僅かであるがチャールズの讃美歌が見られる。

チャールズの讃美歌が大半を占める讃美歌集は、1740年から現れ始める。1740年の*Hymns and Sacred Poems*におさめられているものは殆んどすべてがチャールズの作品である。1741年の*Collection of Psalms and Hymns*では、一旦、チャールズの作品の割合が減り、チャールズの作品らしきものは15ぐらいとなるが、1742年の*Hymns and Sacred Poems*では、再びチャールズの作品が大半を占めている。チャールズ存命中に出版された讃美歌集（および詩集）を内容別に数えると次のようになる。チャールズの作品をまったく含まないものが1冊（チャールズタウン讃美歌集）；他の作者の作品と一緒に彼の作品がおさめられたものが8冊；チャールズのものだけによる作品集が34冊；作品集ではなく個別に出版された彼の作品が18作品；散文作品の付録のようにして彼の作品がおさめられている出版物が少なくとも15冊；初期の作品から抽出された作品集が25冊<sup>6</sup>。メソジスト派の標準的讃美歌集と言われる1780年の*A Collection of Hymns for the Use of the People Called Methodists*は、ほぼ完全にチャールズの作品によって占められている<sup>7</sup>。メソジスト派の組織が整備され、イギリス各地でメソジスト会員が増加していった時期に、チャールズの多くの作品はメソジスト会員にとって入手しやすくなり、18世紀末にはメソジスト派会衆賛美のための讃美歌集の核となるのである。チャールズの作品である讃美歌は、メソジスト派会衆賛美に独自性をもたらす重要な働きをした<sup>8</sup>。

---

*Representative Verse of Charles Wesley*, pp.379–386.

<sup>5</sup> Oliver A. Beckerlegge, 'Charles Wesley's Poetical Corpus' in S.T. Kimbrough, Jr. ed., *Charles Wesley: Poet and Theologian* (Nashville: Kingswood Books, 1992), pp.38–39.

<sup>6</sup> *Ibid.*, pp.38–39.

<sup>7</sup> Baker, *Representative Verse of Charles Wesley*, p. ix.

<sup>8</sup> メソジスト派が教会ではなく、ジョンの信仰指導に従う自発的な協会だったことが、独自の賛美歌の使用を容易にした一因である。

メソジスト派は、その特有な会衆賛美ゆえに、「歌う教会」とも称される。しかし、会衆賛美でメソジスト派によって用いられた曲について考えるならば、独自性があったとは言いがたい。讃美歌を会衆が歌えるようにと、ウェスレー兄弟はいくつかの曲集を出版している。しかし、讃美歌集とは異なり、曲集の出版は、種類も版も讃美歌集に比べると極めて少ない<sup>9</sup>。Dr. A. Gordonが「メロディーに豊か」<sup>10</sup>とチャールズの讃美歌を評しているが、しかし、それはチャールズによって作られた曲（旋律）を意味したとは思われない。チャールズは、自ら作曲する道ではなく、既存の旋律を借用する道を選択した。もし、曲においてメソジスト派に独自性を認めるとするならば、幅広いジャンルからの借用といった既存の曲からの選択方法においてであろう<sup>11</sup>。彼が音楽への造詣に深くなかったのではない。音楽への彼の関心は、彼の二人の息子への英才教育に例示されているように非常に強かった<sup>12</sup>。彼の讃美歌と音楽の関係は、イギリスの同時代の讃美歌作者と比べはるかに重要であり、後で言及するある意味において、彼の作品は確かに「メロディーに豊か」なものなのである。しかし、讃美歌がまだ読むものとの考えが残っていた時代にチャールズらは生きていた。メソジスト派の会衆賛美に独自性をもたらしたのは、曲ではなく彼が作詩した讃美歌にこそある。

---

<sup>9</sup> そのことは、ウェスレー著作集にまとめられている曲集リストからも明らかである。*Works*, Vol. XIV, 'Musical Works', pp. 345–346.

<sup>10</sup> *DNB*, XX, p.1212.

<sup>11</sup> ヘンデルはチャールズの讃美歌に曲をつけた。そこで、ある人々は、メソジスト派独自の曲が少なかったとしても、音楽家ヘンデルが作った曲だけによっても18世紀メソジスト派の曲には注目すべき独自性もたらされていると考えるかもしれない。しかし、18世紀のメソジスト派にはヘンデルの曲は知られていなかったと思われる。Francis B. Westbrook, *ome Early Methodist Tune Books* (Penzance: Headland Printing, 1974), pp.20–23.

<sup>12</sup> Charles Wesley, *The Journal of Charles Wesley* (以下、Journalと略す), 2 vols., (Michigan: Baker Book House, 1980), II, pp. 151–166. メソジスト派の曲については Erik Routley, *The Musical Wesleys* (London: Spottiswoode Ballantyne & Co., 1968) と Carlton R. Young, *Music of the Heart: John & Charles Wesley on Music and Musicians*

## II. チャールズの詩作活動

チャールズの詩がジョンによって讃美歌集におさめられ始めたのは、チャールズが福音主義に基づく個人的回心を経験してからであった。しかし、1738年の回心がチャールズに詩作活動の契機と才能をもたらしたと考えると、正確なチャールズ像は得られない。チャールズには、それまでに詩才を培う恵まれた環境が備わっていたのである。

チャールズが詩作に対して強い関心を抱きはじめてしたのは、幼少の時期を過ごしたリンカーンシャー、エプワースの牧師館においてである。英国国教会高教会派牧師かつ詩人の父サムエルは、*The Life of our Blessed Lord and Saviour Jesus Christ: an Heroic Poem* (1693)などをはじめ数々の詩を出版している。また、*An Epistle to a Friend concerning Poetry* (1700)ではイギリスの詩を批評し、宗教的かつ倫理的観点から批判を加えている<sup>13</sup>。父親の影響は、チャールズの兄や姉妹にも顕著であり、チャールズは子供時代に兄や姉妹たちと詩作をして遊んだ。後に、長兄サムエルは詩人となり、*The Song of the Three Children* (1724)や *The Christian Poet* (1735)などを出版している。また、姉メヘタベル Mehetabel (Hetty)の詩は *the Gentleman's Magazine* など多くの雑誌に掲載され、「彼女の詩の才能は注目に値するもの」であったとされる<sup>14</sup>。

チャールズが詩作技術を習得したのは、ウェストミンスター・スクールとオックスフォード大学在学中であった<sup>15</sup>。詩作の基礎技術を、彼は古典文学を中心とする教養教育によって身につけた。貴族や国教会聖職者などが属する上層社会では、実学重視の中流社会層の教育とは対照的に、自由な人間らしい存在としての教養の習得が尊ばれ、古典ギリシア・ローマの詩をそらんじ

(London: Hope Publishing, 1995) がある。

<sup>13</sup> DNB, XX, p.1227. DNB には父サムエルの他の出版物も記されている。

<sup>14</sup> DNB, XX, pp.1227-8. DNB には、兄サムエルの他の出版物も記されている。Richard P. Heitzenrater, *The Elusive Mr. Wesley: John Wesley His Own Biographer*, 2 vols., (Nashville: Abingdon Press, 1984), I, p.160.

<sup>15</sup> Baker, *Representative Verse of Charles Wesley*, pp. xii-xiii and xxii.

ることや、それらを模倣して詩作できることが評価された。そのため、彼は、教育の核として Latin Augustan poets や Horace, Virgil, Ovid や late Augustan Juvenal などの古典の英訳などを教えられた。学生時代のギリシア・ラテン古典の英訳経験があったからこそ、後のチャールズが 18 世紀的表現を用いた英雄詩体二行連句(heroic couplet)の書簡体詩をジョンやジョージ・ホイットフィールド、ツインツェンドルフなどに宛てて書けたのである<sup>16</sup>。また、古典以外の文学作品も副次的教材として用いられていた。このような教材を用いた教育によって、チャールズは、古典や聖書、祈祷書などの深い知識とそれらを模倣する高度な能力を得たのである<sup>17</sup>。Dr. Batt は、チャールズの詩に含まれる文学的引喩 (literary allusion) を分析し、シェークスピアをはじめ、ミルトンやハーバート Herbert、ドライデン Dryden、A.Pope ポープ、ヤング Young といった多くの文学作品からの引喩をチャールズの作品に数多く突き止めている<sup>18</sup>。

チャールズの詩作技術は、家庭や学校でその素養や基礎を身につけて終わったのではなく、彼が新たな技法に対して常に関心を抱き、それらを吸収していくことで発展していく。その好例が、ドイツ経験主義のモラヴィア派を通して触れたドイツ語創作讃美歌である。兄ジョンはアメリカ植民地ジョージアに滞在していた 1736 年 12 月から 1737 年 7 月の間に、Freylinghausen や Richter, Zinzendorf などのドイツ語創作讃美歌を英訳し讃美歌集におさめて出版している。その後、ジョンの英訳作業は、Spangenberg など他のモラヴィア派信徒のものや、Tersteegen や Gerhards, Scheffler などのルター的敬虔主義者 Lutheran Pietists のものにまで及んでいく。チャールズがドイツ語創作讃美歌を英訳したかは明らかではない。チャールズがドイツ語讃美歌を英

<sup>16</sup> チャールズがラテン古典の英訳を練習したと思われるこの時期の断片的資料が残っている。Beckerlegge, opt. cit., p. 35.

<sup>17</sup> ウォッツよりもチャールズのほうが模倣に長けていたようだ。Kenneth D. Shield, 'Charles Wesley as Poet', in S.T. Kimbrough, Jr. ed., *Charles Wesley: Poet and Theologian* (Nashville: Kingswood Books, 1992), pp. 49-50.

<sup>18</sup> Baker, *Representative Verse of Charles Wesley*, p. xxiii. また、Shield, opt. cit., p.46 にも同様な説明がある。

訳できるほど果たしてドイツ語に堪能であったかという議論さえ存在する。しかし、チャールズの詩作技法がドイツ語讃美歌から影響を受けていたことは彼の讃美歌に見られるある特徴があるため否定しがたい<sup>19</sup>。これも詳しくは後で触れるが、チャールズはドイツ創作讃美歌に触れ、彼の詩作活動において新たな形式を用いた実験に着手していったと思われる。

同時代のイギリス讃美歌詩人がチャールズの詩作に影響を与えていたことも、もちろん、重要である。たとえば、兄ジョンは、オックスフォード大学の学生時代に非国教派聖職者ウォッツ Watts の創作讃美歌を読んで彼の神学にも親しんでおり、植民地ジョージアで英国国教会の礼拝で用いるために最初に出版した先述の讃美歌集にも Watts の讃美歌をおさめている。その後、メソジスト運動指導者となったジョンは、ウォッツとの間に互いに尊敬しあう関係を築いていった。チャールズの多くの讃美歌も、ウォッツの基礎的成果に多くを負っていると言われる<sup>20</sup>。他の同時代人には、W. ウィリアムズ、E. ペロネー、A.M. トップレディ、J. ニュートン、W. クーパーなどの賛美歌作者がいる<sup>21</sup>。詩人チャールズは、これらの作者の活動に対しても絶えず関心を持ち、彼の創作活動への刺激としていたと考えられる。

また、上層社会の教養を持った妻 Sally は、詩作など文化活動を理解する素地があり、チャールズからの恋愛・求愛の詩をはじめ彼の多くの詩の良き聴き手（読み手）や助言者となったに違いない。福音との出会いと同様、サリーとの出遭いは、彼の詩への関心を減退させるどころか、むしろ、それを増幅させた。また、妻を通じて、チャールズには文学的素養を持った社会層との交流機会が増えたと思われる。

---

<sup>19</sup> Margaret G. Flowers and Douglas R. Cullum, 'Sometime Diversion: The Hymn Translations and Original Hymns of John Wesley', *Methodist History*, vol.41:1, (2002), pp.296–297.

<sup>20</sup> Benjamin A. Kolodziej, 'Issac Watts, The Wesleys, and the Evolution of 18th–Century English Congregational Song', *Methodist History*, vol.42:4, 2004, p.236–237. チャールズから Watts の詩への言及は、*Journal*, II, p. 273 にあり、また、Doddrige への言及は *Journal*, I, p.157, 25th Jul. 1739 and II, p. 64, 15th Aug. 1749 にある。

<sup>21</sup> 原恵、横坂康彦『新版 賛美歌:その歴史と背景』(日本キリスト教団出版局、2004年)、116–120頁と123–128頁を参照せよ。

以上のように常に詩作技術向上に打ち込むチャールズを描いたが、そのような描写はチャールズの一面を故意に強調していると批判されるかもしれない。しかし、メソジスト聖職者であった Henry Moore による次のような興味深い記録が存在する。

When at the University, in early youth, his brother (as he informed me) was alarmed whenever he entered his study. *Aut insanity homo, aut versus facit.* [Moore's footnote translates: 'the man is mad, or making verses.'] Full of the muse, and being shortsighted, he would sometimes walk right against his brother's table, and, perhaps, overthrow it. If the 'fine phrenzy' was not quite so high, he would discompose the books and papers in the study, ask some questions without always waiting for reply, repeat some poetry that just then struck him, and at length leave his brother to his regularity. ... When he was nearly fourscore, he retained something of this eccentricity. He rode every day (clothed for winter even in summer) a little horse, grey with age. When he mounted, if a subject struck him, he proceeded to expand, and put it in order. He would write a hymn thus given him, on a card (kept for the purpose) with his pencil, in shorthand. Not unfrequently he has come to our house in the City—road, and, having left the poney in the *garden* in front, he would enter, crying out, 'Pen and ink! Pen and ink!' These being supplied, he wrote the hymn he had been composing. When this was done, he would look round on those present, and salute them with much kindness, ask after their health, give out a short hymn, and thus put all in mind of eternity.<sup>22</sup>

このような常軌を逸した印象を与える彼の詩作への情熱が、ジョンにも勝る詩の才能をチャールズに与えたと言えよう。Dr. Bett はチャールズとジョンの詩の特徴を分析し一覧表を作り、ジョンの詩がチャールズのものに比べ平凡 pedestrian であったと述べている。彼の一覧表のいくつかの点に

---

<sup>22</sup> Baker, *Representative Verse of Charles Wesley*, p. xii. ベーカーは、Henry Moore, *The Life of Rev. John Wesley*, 2 vols. (1825), Vol. II, pp. 368–9 から引用している。

関してラッテンベリーやベーカーが批判を加えているが、この二人にしてもチャールズの詩才の高さを否定してはいない<sup>23</sup>。

## 1. 作品数と題材

チャールズの偉業として驚かされるのは、まず、彼の作った作品の膨大な量とそれらの詩が扱った領域の広さである。その膨大な創作活動の正確な全体像を把握する試みの画期的なものとして1962年のベーカーの著書がある。ベーカーは、チャールズの詩に関連する一次資料を印刷資料と原稿とに分類して詳細に紹介している<sup>24</sup>。ベーカーによれば、約9,000という膨大な数の詩 poem をチャールズは遺している<sup>25</sup>。

それらの詩の中には、会衆讃美として使用するには長すぎるものも存在する。たとえば、現在でも良く知られている讃美歌 ‘O’ for the thousands tongues’の原詩は18節(stanza)まで続くのである。この詩は、集会で歌う讃美歌としては長すぎて不適切であり、個人的な瞑想のために読む讃美歌としての特徴が顕著である。メソジスト派の集会では、このような長い讃美歌はその場の会衆によって歌う節が選ばれていた<sup>26</sup>。しかし、このような長い詩は、チャールズの作品では一部に過ぎない。ベーカーによると、チャールズの約9,000の詩全体は、約27,000の節と約180,000の行(line)から成り立っている<sup>27</sup>。この数値を用いた単純計算によっても明らかなように、チャールズの大部分の作品は短いものであり、実際には1節から2節ほどの作品がほとんどであった<sup>28</sup>。膨大な詩の産出という彼の偉業を解き明かす第一の鍵は、もちろん、彼の詩作への情熱ではあるが、しかし、それ以外の鍵としては、詩の短さという点も重要であろう。また、チャールズは、作りかけの詩をその

ままにして、同じテーマで同じような詩を書いている<sup>29</sup>。これも彼の詩の総数を増した要因と考えられる。チャールズの詩には、修正を想定しているものや、しっかり修正されたものも数多く存在するが、しかし、完成していないと思われるものも散見される。チャールズには即興詩人的側面があり、その場限りで完成を求めなかった即興的な詩も存在するのである<sup>30</sup>。

約9,000にも及ぶチャールズの詩のうち讃美歌(hymn)の数については、従来、約6,000から約6,500あると言われてきた。ところが、彼の讃美歌が実際にいくつあるか数えることは至難の業である。そこには、いくつもの難問が立ちだかる。讃美歌作者というのは彼の一面に過ぎず、チャールズは日常生活で感じたものを詩的に表現することに情熱を抱いており、必ずしも讃美歌として用いられることを想定して詩作していない。「神」や「主」などキリスト教用語が使用されていたとしても、福音的とは言えない詩もある。Lofthouse がチャールズの詩を讃美歌と分類することの困難さを訴えているのは、このような理由のためである<sup>31</sup>。また、ベーカーは、讃美歌との境界線上にあるような詩の存在も指摘し、それらの正確な峻別には、まず、「讃美歌」とは何かを問う定義自体から議論を始める必要があると論じている<sup>32</sup>。チャールズは、宗教的題材以外に、七年戦争や1750年のロンドンの地震、知人の死などの諸事件をも題材として作詩した<sup>33</sup>。これらの詩を讃美歌として数えてよいかという判断は、それらの詩を厳密に分析し宗教的メッセージの内容を確認しなければならない。また、彼の詩には、妻や家族によせた極めて個人的な詩も多い。息子サムエルがローマ・カトリックへ改宗したことへの失望を表した詩や、神をとるか Sarah Gwynne との結婚をとるか求愛に悩む詩などである。Shields は、このような個人的な詩を誰と分かち合えと

<sup>23</sup> Flowers and Cullum, *opt. cit.*, pp.297–298.

<sup>24</sup> Baker, *Representative Verse of Charles Wesley*, pp. 379–394.

<sup>25</sup> *Ibid.*, p. xi.

<sup>26</sup> Shields, *opt. cit.*, pp.58–59.

<sup>27</sup> Baker, *Representative Verse of Charles Wesley*, p. xi.

<sup>28</sup> *Ibid.*, p. xi.

<sup>29</sup> Shields, *opt. cit.*, p. 60.

<sup>30</sup> Baker, *Representative Verse of Charles Wesley*, p. xi.

<sup>31</sup> W. F. Lofthouse, ‘Charles Wesley’ in *A History of the Methodist Church in Great Britain*, 4 vols., (London: Epworth Press, 1965–1988), vol. I, pp. 127–128.

<sup>32</sup> Baker, *Representative Verse of Charles Wesley*, p. liii.

<sup>33</sup> Beckerlegge, *opt. cit.*, p.36.

いうのかと困惑している<sup>34</sup>。

## 2. 詩作技法

チャールズの詩才を示すのは、彼が遺した詩の膨大な数だけではない。むしろ、彼の作った詩の質の高さにこそ、彼の才能を示す証拠がある。詩の形式を考える場合、韻(rhyme)を踏むことを連想するが、チャールズは韻を補助的なものとしか考えておらず、不完全な韻を用いた詩を多く書き遺している。それゆえ、彼の詩才は、韻以外の点から検証する必要がある<sup>35</sup>。

チャールズの詩才を形成した最も重要な要素は、彼がウェストミンスター・スクールやオックスフォード大学で受けたギリシア・ラテン古典の学びである。古典教育での重要な学科は、古代ギリシアの法廷弁論に起源を持つレトリック（弁論術・修辞術）である。レトリックには、tautotes, 前辞反復 anadiplosis, 倒置反復 antistrophe, 異義復用法 antanaclasis, epizeuxis, 行頭[首句]反復 anaphora など非常に多くの手法が存在し、習得にはかなりの時間がかかる<sup>36</sup>。しかし、レトリックを活用すれば、多くの言葉を節約し文章を簡潔にし的確な表現で効果的な印象付けが可能となる<sup>37</sup>。チャールズは、30歳ごろまでにはレトリック活用力を十分に身につけていた。彼は、対句や対比などを巧みに取り込むことで、詩の中の語句や引喩に豊かな意味を帯びさせ、また、詩全体に緊張感をもたせることに成功している<sup>38</sup>。

また、ロジック（論理学）も古典教育の重要な学科である。その学習成果として、交差対句法（交錯配列法：chiasmus）などのロジックを、チャールズは無意識に使えるようになっており、彼の詩は、極めてロジカルなもの

なった。彼の詩は、一つの節で一つの主題を分析し、次の節がそれを受けて別の主題を分析するというように分析の積み上げであり、各詩は一つのアスペクトから別のアスペクトへと発展する論理的構造となっている。決して、ある主題を気の赴くままに詠っているのではない。彼は、節ごとに論理的に積み上げていく手法によって、あるものは興奮のうちに、また、あるものは安らぎのうちに幕を閉じる劇のプロットを思わせる詩を生み出した<sup>39</sup>。

このように、チャールズが受けた古典詩やレトリックといった古典訓練は彼の詩の語彙や形式、構造などに反映され、彼は、古典教育によるそれらの土台の上に聖書や個人的体験などの要素を付け加えていったのである。その詩的技巧の堅固な土台ゆえに、チャールズの作詩法(versification)は芸術的水準を満たすことができたと言われる<sup>40</sup>。

チャールズの詩才を示すもう一点は、抑揚(modulation)である。ペーカーによれば、この点での巧みさゆえに、「チャールズは詩趣の感覚を帯びた単なる讃美歌作者ではなく、讃美歌を書いた本物の詩人だった」のである<sup>41</sup>。チャールズの抑揚の技巧は、残念なことに、今日の我々には容易に理解できない。一つの理由は、18世紀にすでに始まった語句アクセントの位置移動である。たとえば、acceptable のアクセントは第一シラバスから第二シラバスへと移った。そのため、後の讃美歌では第一シラバスにアクセントがある accepted に語句が変更されている。この種の問題は、Bett が詳しく分析している<sup>42</sup>。また、別の理由は、チャールズの讃美歌に曲がつけられたことである。曲によって我々は惑わされ、もともとのチャールズの抑揚が謎になってしまう。

レトリック、ロジック、抑揚の点でチャールズが同時代の著名な詩人たちに等しい高水準の詩才を有していた証拠として *Wrestling Jacob* がある。この詩は、後世の英文学者たちにも優れたイギリス詩として取り上げられている。チャールズは、このように世間で高く評価される作詩技巧を獲得していたにもかかわらず、世間で評価される詩に固執しなかった。

<sup>39</sup> *Ibid.*, pp. xxxvi–xxxix.

<sup>40</sup> *Ibid.*, pp. xiii–xiv.

<sup>41</sup> *Ibid.*, p. xlviii.

<sup>42</sup> *Ibid.*, p. 1.

<sup>34</sup> Shields, *opt. cit.*, pp. 64–66. サムエルは後に父と和解し、チャールズの詩に曲をつけた。Frank Baker, 'Charles Wesley's Letters', in S.T. Kimbrough, Jr. ed., *Charles Wesley: Poet and Theologian* (Nashville: Kingswood Books, 1992), pp.75–76 には、Sally Gwynne へのチャールズの愛の詩と詩集の説明や例がある。

<sup>35</sup> Baker, *Representative Verse of Charles Wesley*, pp. 1–lii.

<sup>36</sup> *Ibid.*, p. xxxiii.

<sup>37</sup> *Ibid.*, p. xxvi, ペーカーは復唱 repetition の例として、'Enough for all, enough for each, Enough for evermore'を挙げている。

<sup>38</sup> *Ibid.*, p. xxv.

そのことを示すものは、第一に、チャールズが詩に用いた語彙である。チャールズの語句選択は、漠然なものや示唆的なものを避け、意味の正確さは勿論のこと、鮮明さや鋭さ、厳密さに注意を払った巧みな技であると評される。ジョンも、讃美歌集の序文にてチャールズの語句選択の的確さや優秀さを示唆している<sup>43</sup>。古典知識豊かなチャールズは、時折、彼自身の考えを明確にするためにラテン語を使用している<sup>44</sup>。単音節のアングロサクソン系語句は力強さに富み行動の表現には適しているが、多音節のラテン系語句はより精密で思考表現に適しているからである<sup>45</sup>。しかし、全般的には、チャールズはアングロサクソン系の語句を多く用いる。新古典主義時代の文学作品がラテン語やギリシア語で飾られていたにもかかわらず、チャールズはそれらの語の使用を控え、ほとんど母語を使用したのである。チャールズはラテン語やギリシア語に精通してはいたが、ジョンが説教集などの執筆でしたのと同様、チャールズもメソジスト派の「普通の人々のために普通の英語で書いた」と思われる<sup>46</sup>。

第二には、チャールズが用いた韻律(metre)である。同時代の同じ創作讃美歌作者であったウォッツとは、この点で対照的である。僅かな曲しか入手できない時代にあつて、ウォッツの作品のおよそ 90 パーセントは普通律(Common Metre)と Short Metre と Long Metre の三つに属す一般的形式で作られている<sup>47</sup>。チャールズが最も好んだ形式は、ABABCC と韻を踏む 8.8.8.8.8.8 の形式であり、1,100 以上の詩をこの形式で書いている。次に好んだ形式は、AABCCB と韻を踏み、第一のものよりもスピード感のある 8.8.6.8.8.6.をとる形式であり、900 以上の詩をこの形式で作っている<sup>48</sup>。しかし、チャールズ

の詩には、それら以外の韻律が満ち溢れている<sup>49</sup>。彼の韻律の多様さの一つの起源として、モラヴィア派の讃美歌を歌った経験により、1739 年からチャールズが実験を開始したことが考えられる。彼はモラヴィア派の讃美歌が持つ基本パターンに着眼して簡略化を試みたり、また、逆にそれらのパターンを応用したりしてモラヴィア派の讃美歌の特徴を完全に自分自身のものとしている<sup>50</sup>。また、チャールズは、1741 年からは短短長格(弱弱強格: anapaests)の実験を開始し、5.5.5.5.6.5.6.5.や 10 10.11.11.の形式も採用し始める。これらは、短短長格(弱弱強格)の古いバラッド(ballad: バラード)の改変であった。巷ではバラッド・オペラなども流行し、教育を受けていない当時の庶民に親しみのあったものはバラッドであったことから、チャールズは会衆賛美により適した詩の作成を迫っていたと思われる<sup>51</sup>。Shields は、かつて、ベーカーが叙情詩(lyrics)と分類したチャールズの詩の大部分は、実際は叙情詩ではなく一般的バラッド韻律の変形だと指摘し、チャールズのバラッド韻律採用の多さを強調した<sup>52</sup>。

一般的韻律に縛られないチャールズのこの変則さには、音楽も重要な要素である。元来、チャールズは、ありありと情景が思い浮かぶジョン・ダン派の形而上詩を好んでいた。形而上詩には、すでに詩の中にある種の音楽があるため、実際の音楽はむしろ詩を乱すものであつて不要である。形而上詩は、静かに個人的に読むディボーションナルな詩である<sup>53</sup>。しかし、前述のように、チャールズの息子たちへの英才教育にも見られるように、彼は音楽への造詣があり、高い音楽的センスを有していた<sup>54</sup>。チャールズが作った詩には、音楽を意識してつくられたと思われるものが数多く見られる。チャールズが持っていた音楽知識やセンスゆえに、彼が詩を作るときに彼の頭の中に音楽が

<sup>43</sup> *Ibid.*, p. xviii.

<sup>44</sup> *Ibid.*, p. xviii.

<sup>45</sup> そのため、チャールズの詩にはラテンの使用は必ずしも多くはないものの、ラテン古典からの引喩を見落とさないためにも彼の詩の分析には古典語辞書 lexicon が欠かせない。*Ibid.*, pp. xx and 1–lii.

<sup>46</sup> *Ibid.*, pp. xx.

<sup>47</sup> *Ibid.*, p. xlv.

<sup>48</sup> *Ibid.*, p. xlv.

<sup>49</sup> *Ibid.*, p. xlv.

<sup>50</sup> *Ibid.*, p. xlvii.

<sup>51</sup> *Ibid.*, p. xlvi.

<sup>52</sup> Shields, *opt. cit.*, pp. 48–49. ほとんどが lyrics 叙情詩としたベーカーの指摘は、Baker, *Representative Verse of Charles Wesley*, p. xi にある。

<sup>53</sup> Shields, *opt. cit.*, pp. 52–53.

<sup>54</sup> Baker, *Representative Verse of Charles Wesley*, p. liii.

流れており、チャールズの詩のあるものは読むよりも歌うことを念頭において作られたと考えられる<sup>55</sup>。この解釈は、彼の詩が一般的韻律の形式に拘束されていないもう一つの理由として重要であろう。チャールズの詩や讃美歌研究では、これから音楽分野の研究も貴重な視点を提供していくに違いない。

チャールズは、メソジスト派会衆賛美に適した詩作を意識し変則的形式を用いた。しかし、*Wrestling Jacob* に代表されるように、彼は一流の詩才を確かに有していた。Shields は、チャールズの詩が権威的英文学者から受け入れられない理由として、チャールズが、①詩の格調の良さにこだわらなかったこと、②音楽を意識して作詩したこと、③文学界からの評価を得る道を選ばなかったことを挙げている。チャールズは高く評価される詩を書けたが、書かなかったのだと Shields は考える<sup>56</sup>。1738年の信仰体験以降、聖化の道を追求していたチャールズは、宮廷や社交界、コーヒー・ハウス、雑誌などでの一般的名声を敢えて避け、意識して宗教詩を選び、この世の名声と対立する方向へと進んだと彼は推測する<sup>57</sup>。本来、上流階級に向けられていた詩をメソジスト派にもたらし<sup>58</sup>、メソジスト派会衆賛美の発展に大いに貢献したチャールズは、多くの詩とその詩作労力において自己の才能（賜物）を福音伝道へ捧げた<sup>59</sup>。

### III. チャールズとメソジスト神学

チャールズの詩には、ホメロスの『イリアス』や古代ローマの詩人ホラティウス、シェークスピア、ミルトンなどの作品からの引喩や語彙と思われるものが多く見られる。しかし、引喩や語彙の圧倒的な量をチャールズに提供したのは古典作品やその他の文学作品などではなく、聖書である<sup>60</sup>。チャー

ルズのほとんどの引喩は聖書からであり、チャールズの詩は聖書の語句や直喩、隠喩、物語、思想で満ちている<sup>61</sup>。たとえば、1750年の地震を経験して彼が作った詩にしても、聖書のさまざま箇所からの引用が鏤められており、彼が如何に聖書の引喩に精通していたかを物語っている<sup>62</sup>。それゆえ、メソジスト派信徒が、チャールズの讃美歌を歌うということは、聖書を幅広く読むことにも通じていた<sup>63</sup>。

また、チャールズの詩は、聖書解釈やキリスト教解釈をも当然含んでいる。彼の詩には、ルターや M. ヘンリーや教父などが著した聖書註解書からの引喩も散見される<sup>64</sup>。あるいは、地震体験の詩といったものでも、チャールズ流の福音解釈が施されている。Tucker の論文は、地震の原因についての当時の人々の考え方と比較し、チャールズのその詩が如何に福音的解釈を強く打ち出していたかを論じた興味深いものである<sup>65</sup>。また、カルヴァン派二重予定説に強く反対していたチャールズ個人の神学的立場なども、彼の多くの詩の中に見られる。チャールズは、万人救済説を強調したいとき、all や for all を繰り返し使う。彼のレトリックの高度な技巧はその繰り返しをうまく包み隠し、歌っている人々を知らず知らずのうちに彼の解釈へと導く力を発揮した<sup>66</sup>。このように、積極的に聖書解釈を詩に織り込んだ理由として、チャールズが個人的信仰体験のあと、自分の体験についての沈黙は咎められるべきものであり、その体験を人々に伝えなければならないとの使命感を強く認識

<sup>61</sup> *Ibid.*, p. xxv.

<sup>62</sup> Karen B. Westerfield Tucker, ‘“On the Occasion”: Charles Wesley’s Hymns on the London Earthquakes of 1750’, *Methodist History*, vol.42:4, 2004, p.206–207.

<sup>63</sup> Baker, *Representative Verse of Charles Wesley*, p. xxiv.

<sup>64</sup> *Ibid.*, p. xxiv.

<sup>65</sup> Tucker, *opt. cit.*, p.206–218.

<sup>66</sup> Baker, *Representative Verse of Charles Wesley*, p. xxxiv. 今日においても、チャールズの讃美歌がローマ・カトリック教会やアメリカ改革派、アメリカ長老派をはじめ多くの教団・教派によって歌われていることを横坂氏が一覧表を使って明示している。横坂康彦、「21世紀に歌い継がれる讃美歌とは:ウオッツから19世紀末までの英語讃美歌をめぐって」、『礼拝と音楽』、No. 112 (日本基督教団出版局、2002年)、36–40頁。

<sup>55</sup> Shields, *opt. cit.* p. 48.

<sup>56</sup> *Ibid.*, p. 66.

<sup>57</sup> *Ibid.*, p. 46.

<sup>58</sup> *Ibid.*, p. 46.

<sup>59</sup> Kolodziej, *opt. cit.*, p. 236.

<sup>60</sup> Baker, *Representative Verse of Charles Wesley*, p. xxii.



したためだと言われる。彼の信じていた万人救済説に支えられて、彼は、万人のために「聖潔（聖化）」や「キリスト者の完全」といった神学的立場を詩の中で積極的に表明していったと解されている<sup>67</sup>。

ラッテンベリーは、'It is certainly true that his, Charles's and not John's, was the most effective and comprehensive statement of Methodist doctrine' と述べ<sup>68</sup>、また、E.H. Sugden も「メソジスト派神学の本当の体現は、メソジスト讃美歌集であり、特にチャールズ・ウェスレーの讃美歌である」と指摘する<sup>69</sup>。Hildebrandt にしても、断定は避けつつも、チャールズこそメソジスト派に神学をもたらしたのだと示そうとした<sup>70</sup>。しかし、Langford はその証拠が少ないという理由から彼らの説を否定する。チャールズは、すでに起こっていたリバイバル運動に表現方法を提供したにすぎないのだと論じ、Langford はチャールズの神学提供者としての役割を否定する<sup>71</sup>。彼によれば、チャールズは新しい教義を表明しておらず、教義の保存者や伝達者に過ぎない。チャールズは、ただ、'he tied theology inseparably to the worship of God; he welded theory and praxis together; he made theology an inseparable part of the holistic love of God.' であり、彼は思想や神学的に特に優れておらず、Praxis theology をもたらしたことにこそ彼の貢献であると Langford は結んでいる<sup>72</sup>。Langford は、実際には、神学的立場を確立したのはジョンであると切り返す<sup>73</sup>。これはジョンにのみ重点を置いたもう一方の極論であろう。

チャールズの詩とメソジスト派神学の関連性においては、チャールズの神

学的独自性の有無とは別に、まだ、重要な問題がある。それは、チャールズの詩への兄ジョンの影響である。チャールズがジョンの弟であったことの重要性は、言うまでもなく、ジョンがチャールズの詩を数々のメソジスト派讃美歌集に採用し、それらの讃美歌集を教義的文書として扱ったことにある<sup>74</sup>。彼らが兄弟でなかったのならば、チャールズの詩がジョンからこれほどまでに高く評価され、また、多く採用されなかったという可能性は否めない。しかし、オックスフォード大学のフェローである学者ジョンと詩人チャールズのこの幸運とも思われる組み合わせは、チャールズの詩にとって必ずしもその真価を発揮させる方向だけに働いたのではない。そのことを理解するには、チャールズを単なるジョンの陰の立役者として捕らえるだけでなく、むしろ、多くの点でジョンと異なり、時には激しく対立した一つの独立した人格として把握する必要がある。

チャールズは、健康上の理由で 1756 年という早くに巡回伝道をやめブリistolやロンドンに定住し、また、ジョンとは逆に非常に仲の良い幸福な夫婦関係を生涯を通じて保つこともできた。チャールズが熱烈な恋愛感情を抱き妻に選んだ Sally はウェールズの富裕な家庭の娘であった。その家の豊かさは、当時、社会的に不安定かつ低収入であったチャールズが結婚の承諾を彼女の親から得ることに窮したほどであった。彼をその窮地から救ったのがジョンである。ジョンは、チャールズのために自ら年間 100 ポンドの収入の法的保証人となった<sup>75</sup>。チャールズは、妻の関係で上層社会との接触が多くなったであろう。このような生活の違いによって、たとえ、兄弟であったとしても、チャールズはジョンとは異なる世界も生き独自の社会的・思想的傾向を強めていったと思われる。それらの相違が、ジョンとチャールズの国教会への姿勢にも影響し、Walter Sellon, Samuel Walker, William Grimshaw, Henry Venn らを巻き込む、メソジスト派内でのジョン派とチャールズ派の対立する陣営を生み出した一因とも言われる<sup>76</sup>。

ジョンとチャールズには神学上の共通点もあるが、しかし、瞬時的聖化へ

<sup>67</sup> Baker, *Representative Verse of Charles Wesley*, p. xv.

<sup>68</sup> John E. Rattenbury, *Evangelical Doctrines of Charles Wesley* (London: Epworth Press, 1954), p. 61.

<sup>69</sup> Thomas A. Langford, 'Charles Wesley as Theologian' in S.T. Kimbrough, Jr. ed., *Charles Wesley: Poet and Theologian* (Nashville: Kingswood Books, 1992), p.97. 園部氏と原氏も同様な考えを紹介している。園部「前掲論文」14 頁； 原「前掲論文」、31-32 頁。

<sup>70</sup> Langford, *opt. cit.*, pp. 99-100.

<sup>71</sup> *Ibid.*, p. 99.

<sup>72</sup> *Ibid.*, p. 102.

<sup>73</sup> *Ibid.*, p. 99-100.

<sup>74</sup> *Ibid.*, p. 99.

<sup>75</sup> Baker, 'Charles Wesley's Letters', p. 75.

の考え方やモラヴィア派へ姿勢などでは対立していた<sup>77</sup>。よく知られている対立は、信徒説教者採用についてチャールズがジョンに対して抱いていた不満である。ジョンに比べチャールズは国教会のあり方に忠実であろうと心がけていた。1751年に、チャールズは何人かの信徒説教者を辞めさせるが、このことは彼が信徒説教者の採用に非常に消極的であることをメソジスト派内に知らしめた。1760年には、信徒たちが合法的に *preaching license* を得ようとした動きに対し、チャールズは怒りをあらわにしている。そのため、独立戦争後のアメリカ合衆国在住のメソジスト派会員のためにジョンが T.コークに按手札を施したとき、それは極秘にされていた<sup>78</sup>。

これらの相違が、ジョンの讃美歌集編纂において、チャールズの詩の選別・採用に何の影響も与えなかったとは考えられない。チャールズの讃美歌が大半を占める 1780 年の讃美歌集においてでさえも、チャールズの数千にもおよぶ詩 *hymns* のうちの僅かを恣意的に選び出したものにすぎない。ジョンによる選別を通過した僅かな詩に対してのみメソジスト派の教義的権威が与えられたのである。チャールズの独自の神学が表現されていた多くの詩があったとしても、それは讃美歌集への編纂過程で、ジョンの神学的フィルターを通過したものだけがメソジスト派讃美歌としての地位を得たにすぎない。また、採用された詩は、ジョンによって信仰生活や教会行事の項目別に細かく分類されて讃美歌集に印刷された<sup>79</sup>。たとえば、家族の使用のための讃美歌 *Hymns for the use of families* という項目があり、その中には、「分娩間近な女性のために」 *For a women near the time of her travail* という讃美歌まである<sup>80</sup>。このような過程を経て、チャールズの詩はメソジスト派会衆賛美に適した新たな意味づけがなされていったのである。詩の選別においても、また、分類においても、当然、ジョンの個人的バイアスが強く作用している。

ジョンの選別を通過したとしても、その詩がチャールズの神学・思想をそ

のまま残しているとは限らない。ジョンは、メソジスト派讃美歌集の編纂時に、通常、採用する詩に加筆・修正を行っていた。ウォッツの詩については、Kolodziej が、ウォッツの詩に対してジョンが取った 8 つの修正方法を紹介している<sup>81</sup>。同様な方法がチャールズの詩に対しても用いられたと考えられる。

「恋に落ちているといつも思い込んでいる」人物だったとベーカーが指摘したように、チャールズはロマンチスト的傾向が強い<sup>82</sup>。Flowers と Cullum も、チャールズのロマンチスト的傾向を認め、それとは対照的に、ジョンを「理性的人間」と評している。理性的ジョンは、ロマンチスト的チャールズの原因詩に用いられていた感傷的表現や性愛的・官能的(erotic)表現を改変し、あるいは削除したようである。たとえば、原詩では「親愛なる贖い主(dear Redeemer)」となっていたものが讃美歌集では「偉大なる贖い主(great Redeemer)」へと改変されている。また、「イエス、わが魂の愛する人よ(Jesus, lover of my soul)」もカットされている。あるいは、チャールズから愛妻 Sally への極めて個人的な愛の詩については、1780 年の讃美歌集におさめる際、原詩ではチャールズとサリーを指した *both* という語句がジョンによって *we* あるいは *us* などに書き直されており、一体どのように分かち合えといふのかと Shields を困惑させた極めて個人的な詩も会衆が共感し合える詩へとジョンによって改変されている<sup>83</sup>。

もちろん、前述のように、チャールズが単独で自ら出版した詩集や讃美歌集も存在する。また、1747—8 年にアイルランドで編纂・出版された讃美歌集はチャールズが監修して出版されたとも言われる<sup>84</sup>。しかし、メソジスト派の標準的讃美歌集となった 1780 年の *A Collection of Hymns for the Use of the People Called Methodists* をはじめ、メソジスト派の讃美歌集の多くはジョンとチャールズが共同編纂者とされている。しかし、一般に、それらの編纂でジョンが主導権を握っていたと考えられており、改変・削除にチャールズが同意したかは明らかではない。それゆえ、厳密な意味において、メソジスト讃

<sup>76</sup> *Ibid.*, pp. 79—80.

<sup>77</sup> Langford, *opt. cit.*, p. 99.

<sup>78</sup> Baker, 'Charles Wesley's Letters', pp. 79—80.

<sup>79</sup> Flowers and Cullum, *opt. cit.*, p. 295.

<sup>80</sup> Beckerlegge, *opt., cit.*, p. 35.

<sup>81</sup> Kolodziej, *opt. cit.*, pp. 239—245.

<sup>82</sup> Baker, *Representative Verse of Charles Wesley*, p. xiv.

<sup>83</sup> Baker, 'Charles Wesley's Letters', p. 76.

<sup>84</sup> Beckerlegge, *opt., cit.*, p. 41. Baker, 'Charles Wesley's Letters', p. 75.

美歌集におさめられている詩をチャールズの讃美歌だと言い切れず、もちろん、それらの讃美歌からチャールズの想いが我々に直接に伝わっているとは断言できない<sup>85</sup>。

しかし、チャールズが、自分の詩を「彼の福音主義の一つの武器」<sup>86</sup>とみなしていたことは否定できない。我々は性急に結論を出す前に、チャールズ の原詩に最初から表明されていた福音信仰のどのような内容や表現がジョン の検閲を無事に通過し、残存しているのかを確認する必要がある。そのため には、ジョンの手が加えられる前の状態に留まっているチャールズの原詩を 探し、メソジスト派讃美歌集におさめられた状態のものとは照合しなければ ならない。メソジスト派のある讃美歌の原詩が Sally への恋の詩であった事実 などから考えると、彼の手紙などに添えられた詩などの調査・分析は必須で ある<sup>87</sup>。チャールズの時代に刊行された彼の詩以外に、刊行・未刊行の彼の 日記や手紙、原稿、メモなどを収集し、それらを多くの研究者の手元に置く 形にまとめあげる必要がある。讃美歌作者であるまえに、詩人であったチャ ールズは、頻繁にメモをとったり知人に詩をプレゼントしたりしつつ詩の 生産を続けていたのであり、彼が遺したその膨大な量と広大な範囲の作品を 網羅してまとめる作業は並大抵のものではないと予測される<sup>88</sup>。

S.T.Kimbrough, Jr.を中心に 1988 年から随時出版がなされているシリーズ *The Unpublished Poetry of Charles Wesley* は、バーカーの書で扱われなかったチャールズの未刊行の詩を紹介し続けている<sup>89</sup>。Beckerlegge も、チャールズの散文資料のうち未刊行のものをリストアップして報告している<sup>90</sup>。しかし、

この領域の学術作業はジョンの研究に比べればまだ最近にはじまったにすぎず、本格的なものはこれからである。

## 結論

チャールズが福音を信じてから讃美歌を作る詩人となったと考えるよりも、むしろ、完成された詩人であったチャールズが福音を信じてから福音的な讃美歌も作るようになったと考えたほうが事実に近いと、近年の研究成果によって分かってきた。この「詩人」チャールズの視点なくしては、六千以上もの「讃美歌」を作ったと言われるチャールズの偉業のなぞを解き明かすのは難しく、我々の眼には彼は理解困難な不可思議な偉人として映ってしまう危険があった。しかし、詩人チャールズの形成過程が解明されればされるほど、理解可能な等身大のチャールズが顕わになる。我々は、理解不可能な偉人チャールズを崇めるのではなく、福音に出会った詩人という理解可能なチャールズを得、福音信仰への賜物の活用（才能の犠牲）といったことを学ぶ貴重な事例を手に入れつつある。

チャールズの詩の一部がジョンの編纂した讃美歌集を通じてメソジスト運動の精神的基盤の重要な一要素となり、また、メソジスト讃美歌集におさめられたチャールズの詩が福音的メッセージに満ちていることは彼の時代からすでに分かっていた。しかし、彼の詩がいかにしてメソジスト讃美歌集でその座を獲得したかについては十分な考察がなされてこなかった。彼の詩とメソジスト神学との関係は、チャールズとジョンと間の神学上やメソジスト運動指導上の相違・対立といった問題とも密接に関連しており、チャールズ の原詩の今後の発掘や分析は、十八世紀メソジスト派内部や十九世紀メソジスト派内部の対立の謎を解き明かす一つの鍵として重要となっていくかもしれない。チャールズの「詩」とメソジスト派「神学」との再検討は、メソジスト派の讃美歌集から目を離してチャールズ自身の詩や創作活動に重点を置くといった研究がごく最近まで貧弱であった実態に気づかせてくれる。原詩の調査・分析には、多くのハードルを乗り越える必要があるが、それを超えていく時、ジョンの陰の立役者ではなく、ジョンとは異なる感情表現豊かな

<sup>85</sup> Flowers and Cullum, *opt. cit.*, pp.298–9.

<sup>86</sup> Baker, *Representative Verse of Charles Wesley*, p. xv.

<sup>87</sup> Baker, 'Charles Wesley's Letters', p. 76.

<sup>88</sup> Beckerlegge, *opt. cit.*, p. 37.

<sup>89</sup> S.T.Kimbrough Jr. and Oliver A. Beckerlegge ed., *The Unpublished Poetry of Charles Wesley*, 3 vols. Nashville, 1988–1992. Shields も Kimbrough らの業績を高く評価している。Shields, *opt. cit.*, p.61.

<sup>90</sup> Thomas R. Albin, 'Charles Wesley's Other Prose Writings' in S.T. Kimbrough, Jr. ed., *Charles Wesley: Poet and Theologian* (Nashville: Kingswood Books, 1992), pp. 85–94.

一人の独立した人格を持つ福音主義者チャールズのより生き生きした姿が益々明らかとなるであろう。

(日本大学法学部専任講師、イムヌエル高津教会会員)